

講演

ウィーン古典派解釈における考察 ～ドイツ、およびオーストリアの伝統を考慮して～

講師：ヤン・イラチェック・フォン・アルニン



通訳：西川麻里子

イラチェック
講演

本日はお招きいただき、講演をさせていただけますことを心より感謝申し上げます。

最初に私の音楽的経験からお話したいと思います。

私は12歳の頃に手にしたクラウディオ・アラウの『音楽とともにある人生』という著書に大変感銘を受けました。彼は幼少の頃ベルリンでリストの弟子マルティン・クラウゼにピアノを師事した大ピアニストですが、チリ人であるにもかかわらずドイツ音楽を完全に理解していました。

今でもしばしばこの本を読むのですが、その中に書かれた「木というものは根が深ければ深いほどしっかり高く成長できる」という一文は、私のピアニストそして教師としてさらには人生のモットーとなっています。つまりこれは、「人は常に学んでいかねばならない」ということであり、シューマンも同じような言葉を残しています。

私はウィーン国立音楽大学に招聘されて以来、ベートーヴェンの第一人者として評価されてまいりましたが、毎日フランツ・リストからとても多くのことを学んでおります。

私はリストの生涯について1冊の本を書いたのですが、嬉しいことに大変高い評価をいただいております。一人の作曲家の人生や人となりについて手紙などを通して深く理解することはとても重要なことであり、演奏表現にも反映されます。

私は学生に「常に学べ、好奇心旺盛であれ」と話しておりますが、作曲家の人生や作品成立の背景等を知ることが、実際にピアノの練習をすることと同じくらい重要なことなのです。



ではウィーンとドイツの古典派音楽の伝統についてお話ししましょう。

私はハノーファー出身のドイツ人なので、ウィーンで暮らし始めた2001年当初はよそ者であり、そこからウィーンの伝統について学び始めましたので、両者の違いをはっきりと感じ取ることができます。

1781年にウィーンを初めて訪れたモーツァルトが父親に宛てた手紙には「ここはまさにピアノの王国で、ピアノを聴く人、また習おうとする人がたくさんいます！」と記されています。実際彼もレッスンを行っており、ベートーヴェンがウィーンを訪問した理由の一つはモーツァルトのレッスンを受けるためでした。しかしベートーヴェンはモーツァルトではなくてハイドンのレッスンを受けることとなり、最初の作品をハイドンに献呈しました。

ここからハイドン、ベートーヴェン、ツェルニー、リスト、タールベルグ、ジロティ、ラフマニノフへと伝統が継承されていくと思うと、まさに身震いがする思いです。

ところで、カール・ツェルニーがウィーン古典派に残した功績は非常に大きなものであり、現代のピアノ奏法の様式を作り上げた人物であると言っても過言ではないと思います。

彼の代表作である膨大な数の練習曲は、現代でもピアノを学ぶ若者にとってとても重要なものですが、彼は当時から音楽の教育者として大変有名でした。また若きリストの才能を認め無償で教えたという逸話からも、彼は真の教育者であったと言えるでしょう。

さらに彼は、リストと同時代の弟子であったレシュエイツキーからネイガウス、ギレリスへと続く流派の祖ともなっており、ストラヴィンスキーは「練習曲のみならず彼の多くの作品には真の音楽の血が流れている」と高く評価しています。

ツェルニーが残した多くの著書の中でも『ベートーヴェン全ピアノ作品の正しい奏法』は特に重要で、ベートーヴェンがレッスンの中で述べた事柄、全ての作品へのメトロノームの表示、テンポに関する考え方などが記されています。

私は皆さんに是非ツェルニーの著書を読んでもらいたいと思いますが、中でも1850年に出版された『演奏について』では、いかに練習するべきか、そしてベートーヴェンをいかに演奏するべきか等の演奏様式について詳しく述べられており、特にお勧めしたい一冊です。

私が2001年ウィーンに招聘された折に、光栄にもツェルニー自身の弾いたピアノを演奏する機会を与

えられましたが、その感動は一生涯忘れることはできません。その時『月光ソナタ』の第1楽章を弾いたのですが、残響の少ないそのピアノで楽譜に記された通りの長いダンパーペダルを用いることによって、cis mollのあやしい響きが醸し出されることを理解することができたのです。

またその際、1826年にベートーヴェンからツェルニーに送られた手紙を読むことができました。その内容は「私のツェルニー、お願いがあります。どうぞ私の甥カールの先生になってください。彼は時間の活用が下手なのでまだ思うような成果が上がっていませんが、できる限り忍耐をもって接してほしいのです。たくさんの愛情と熱心さをもって教えてください。」そして「正しい指づかいと拍子感を身に付け、ある程度のテンポで弾けるようにしてから通して弾かせるようにしてください。」という先生としての柔軟な対処を乞うものでした。ここにはベートーヴェンからツェルニーに受け継がれていく教師としての心構えを見ることができます。

ツェルニーが練習曲を通して求めたのは、全ての音を完全にコントロールする指を持つということで、これは現代のウィーンのピアノ奏法に通じるものであります。私も全ての指にはそれぞれの役割があり、それを果たすことが重要であると考えますが、それに関してはショパンがそのレッスンにおいて様々な音色、カンタービレを生み出すタッチの意義について述べていますね。

次にウィーンという街の持つ魅力についてお話したいと思います。私の家と大学の間にはベートーヴェン・ハウスやシューベルト・ハウスがありますが、いたるところに大作曲家たちの痕跡が残っている街で生きることは、私にとって大きな喜びとなっています。そして教会から聞こえてくる当時と変わらぬ鐘の音を耳にする時、私はグスタフ・マーラーの「伝統とは炎を伝えることであり、廃炉を崇拝することではない」という言葉を思い浮かべるのです。このように「ウィーンの伝統は常に発展している」ということを生徒たちに伝えながら、私自身が日々新しい発見を続けています。

我々はともするとウィーン古典派を古い音楽として捉えがちですが、1800年当時、作曲家たちは常に革新的であり、それは当時の現代音楽だったのです。この考え方はとても重要で、例えばベートーヴェンのソナタOp.31-1の冒頭は、突如Gの単音で始まるのですが、この聴きなれない開始に、当時の聴衆は大変なショックを受けたことでしょう。またソナタOp.111の冒頭の特徴的な跳躍音型なども例に挙げられるように、多くの作品を通してベートーヴェンは「発展の限界」に挑んだ作曲家であるといえます。

現代に生きる私たちはロマン派以降の様々な作曲家の作品をすでに知ってしまったため、古典派の作品を古い音楽と感じてしまうのですが、実はその新鮮さが当時の聴衆に大きな感動を呼び起こしたという事実を、そしてその感動を伝えることの大切さを生徒に教えることは私の大きな使命であると感じています。

